

まち歩きイベント組織「六本木探検隊R」実践報告

ーまち歩きから復興支援へー

○澤内 隆（帝国書院／文教大学）

キーワード まち歩きイベント 復興支援 プラットフォーム ネットワーク

1. 目的・方法

ホテルアイビス「六本木探検隊」とは宿泊型まち歩き&イベント企画集団である。ホテルは本来、宿泊し、レストランで食事をし、宴会場でパーティをすところだが、ホテルはそれだけでなく、コミュニケーションの場、プラットフォームである。そこで、居心地の良い空間を協働で創り上げることが目的である。その元気を全国に発信したいという思いから、結成 10 年間目となった。

ホテルの宿泊プランにまち歩きの無料プログラムをオプションとし、日曜日の午後のまち歩きと月曜日の早朝散歩を行う。ルートは参加者の希望に合わせて設定する。特に人気のあるコースは六本木ヒルズの森美術館、東京ミッドタウンのサントリー美術館、新国立美術館を結ぶアートトライアングルを中心としたコースである。ショッピングも行い、路地裏や坂、階段を好んで歩く。参加者が主体的に面白い場所や光景を発見し、皆でシェアするのである。まち歩きイベントは六本木から港区へと広がっていった。東京タワーや青山墓地、お台場なども歩くようになった。

さらに社団法人東京都レクリエーション協会や港区観光協会に加盟することにより活動を広げ、マルチイベント団体として活動している。会費無、会則無のゆるいネットワーク組織である。勿論、ボランティアにより成り立っているものの全国 50 支部、海外 3 支部に拡大した。コミュニケーション・ツールとして人形、酒、焼酎、ワイン、せんべい、マップ、オリジナルTシャツの製造企画も手がけ、コミュニケーション・ツールを創出している。

六本木探検隊が継続している企画講座には「サンタクロースアカデミー」「みなとミュージアム人」「ジャンケンアカデミー」などがある。「六本木探検隊」のブランド力を高めるため、商標登録番号 4934886 号を特許庁から取得した。「サンタクロースアカデミー」で実施している表参道サンタウォークは毎年多くのメディアに登場する風物詩となっている。

さんりく大船渡東京タワーさんままつりは今から 4 年前、六本木探検隊長と大船渡支部長と東京タワー支部長が 3 月に準備をスタートし、平成 21 年 9 月 27 日に実施した。4 月から岩手の地元紙に発表されて以来、多くのメディアに登場した。目黒駅前商店街（品川区）は岩手県宮古市のさんま、目黒区の商店街は宮城県気仙沼市のさんまを使用している。後発の大船渡は「大船渡東京タワーさんままつり」のイベント成功により、ホテルアイビス担当者、六本木探検隊長、東京タワー企画担当者、アカペラカルテット XUXU の計 7 名が大船渡市長より、さんりく・大船渡ふるさと大使に委嘱された。その後、大船渡市観光物産協会と港区観光協会との継続的に橋渡しの活動をするようになった。さんままつりがきっかけで誕生したさいとう製菓「ゆりかもめの玉子」はお台場、羽田、成田、SA 等やレストラン船シンフォニーで販売されている。箱に入っているしおりには「協力：六本木探検隊」と記載されている。

3 月 11 日の東日本大震災により、大船渡市は甚大な被害を受けた。特に魚市場を中心とする水産加工業者は港周辺にあり、壊滅的状况であったが、市役所は高台にあり、復興の司令塔は被害を免れた。

2. 結果

ホテルアイビス六本木探検隊がコーディネートした大船渡市への支援例を述べることにする。

- a) 六本木探検隊基地となっている、六本木ホテル・アイビスは震災後、大船渡市関係者が大船渡の復興のために宿泊する場合、毎日 10 室までを無償提供している。今でも継続中である。
- b) 東京タワー企画部では東京タワーにサンマの形をした全長 6m の「サンマのぼり」を泳がせている。

- c) ㈱日本電波塔では復興支援東京タワー杯ゴルフコンペを実施し、売り上げ全額を大船渡市に寄付。関連グループである㈱マザー牧場のスタッフとともにジンギスカンの肉を使用したバーベキューの炊き出しボランティアで現地入りし、避難所でふるまう。
- d) 一昨年大船渡市へ主催旅行を実施した縁で、㈱はとバスが昨年4月21日に中古の大型バス1台を寄付した。現在、教育委員会所管として被災した市内小・中学校のスクールバスとして活躍している。そのバスはサンマ号と命名され、約200名の小・中学生に利用されている。運転手の雇用創出にも役立った。
- e) 港区観光協会では、港区役所内・増上寺内・東京タワー内にサンマ募金箱を置いている。増上寺内でチャリティコンサートやイベントを行い、イベントの景品は観光協会加盟事業所が負担した。
- d) ㈱シーライン東京は大船渡市内の中学生が修学旅行に東京にくる際に、フリーで乗船し、ケーキセットを提供するしくみをつくった。
- e) ㈱ポケモンでは、大船渡市の各保育所や幼稚園すべてにポケモンを派遣し巡回訪問をした。
- d) 大船渡市長が教科書会社の資料集に執筆した縁で、教科書会社が支援金を寄付した。
- e) 港区区議会の議長、議員が視察に行き、大船渡市と港区との議員レベルでの交流をすることになった。
- f) アカペラカルテット「XUXU」が大船渡の避難所、公民館、福祉施設を訪問し、コンサートを行った。交通費、宿泊費は認定NPO法人「難民を助ける会」が経費支援した。
- g) 長野支部長（山田温泉旅館経営）が大船渡市のために賛同する旅館・ホテル内に募金箱を置き、支援金を届けた。
- h) 六本木探検隊は東京タワー（333m）と東京スカイツリー（634m）の高さを足した「967m（苦勞無視）の恵方煎餅」を発売しようとした矢先に震災があり、急きょ「復興祈念せんべい」に焼き直した。そのせんべいを復興祈念協力者に配布した。

以上すべておおふなと東京タワーさんままつりがきっかけとなり、楽しみながら行った、復興支援の実例である。そのつながりをさらに強固にするため何度も大船渡市に行き、市長や商工会議所会頭、観光物産協会長とともに大船渡と全国をつなぐしかけやしくみをつくり続けている。7月27日より5日間、「子ども絆キャンプIN大船渡2012」を子どもゆめ基金の助成を受け実施した。また、第4回東京タワーさんままつりも9月23日（祝）に実施する。さんまは「時間」「空間」「仲間」の三つの間も意味している。三間を通して絆がより深まり、六本木探検隊の気持ち良い、心地よい良いイベントが実現するのである。24年6月より、大船渡市商工会議所より委嘱をうけ、「震災後の新しい商店街を考える委員会」に協力している。

4. 考察・結論

ホテルアイビス六本木探検隊は収益をあげているわけではない。わくわくどきどきした居心地の良い空間づくりを参加し者とともに創り上げていくという実践を継続しているだけである。会費無、会則無というゆるいネットワークが、人のつながりだけで継続されている。しかし、探検隊プログラムの参加者がその後ホテルのリピーターとなり、同窓会やクラス会などのパーティをする例が多い。震災後、劇的パラダイムシフトが進行している。マネタリー経済からボランティア経済へのシフトが進んでいる。

ワクワクドキドキ感、ヒラメキ・トキメキ・キラメキのあるイベントコンテンツを創出することが感性を高める活動となるのではないか。カネをなるべく使用せず、モノ・ヒト・スペースとアイデアがあれば、気持ち良い、心地良いイベント空間が創出できる。その条件としてヒトとヒトがつながり、広がり、継続するイベントの仕掛け・仕組みづくりを行うことが重要である。

ワクワクドキドキ感のあるイベントコンテンツが実施されれば、ステークホルダーの活性化につながり、コミュニティビジネスやソーシャルビジネスにも発展するであろう。ワクワクドキドキする時間・空間・仲間の三間の中でイベント力が高まっていくのである。

活動10年目を迎え、これからはフューチャーセンターとしての機能を担っていくことが六本木探検隊のミッションである。その試みとして群馬県上野村の地域活性化イベント支援も始めている。

イベントは人と人とのつながる場である。気持ち良い空間、居心地の良い空間を創出していくためにはさらなる持続可能な仕組み仕掛けを実践していきたい。